

1 はじめに

2016合同教育研究全道集会の音楽教育分科会は、当初二日間の実施予定だったが、共同研究者の都合で二日目のみの開催となってしまった。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

分科会は、共同研究者、レポーター含めて7名の参加にとどまったが、4本のレポートをもとに有意義な話し合いができた。特に、大学生からの素朴な質問や意見にハッとさせられる場面もあり、刺激を与えてくれるものであった。

2 分科会に向けての基調

ここでは、共同研究者の石窪氏が提起した文章を要約して紹介していく。

『近年、学校全体にますます上意下達の管理と競争的な教育システムが押し進められ、教師は委縮し失敗の許されない、きわめて窮屈な中、与えられたことをこなすだけで精一杯である。こんな学級にしたい、こんな学校にしたいという夢や希望を語ることもすらできない状況になっている。』

子どもたち一人ひとり、個性豊かに伸び伸びと育つ権利をもっている。しかし現実には・・・できるだけ効率的に早く、切り刻んだ知識を反復・訓練で詰め込み、「学力テスト」で順位がつき、自己責任を突きつけられるという競争と成果主義の中にいる。そして、心許して相談する相手もいなく、自分の居場所を見つけられないでいる。人間関係も複雑で深刻化し、将来の夢を描くこともできず、無気力で投げやりになり、悶々としながら日々を過ごしている。

こうした現実の中、子どもたちは様々な思いをいっぱい詰め込んで音楽室にやってくる。その思いを一つ一ついねいに受け止めなければならない。私たちの分科会では、教師が子どもたちとの人間的な交わりを大切に、共感し学びあい、喜びあふれる子どもたちの事実を出し合ってきた。今までの学びを大切に、今年も充実した話し合いをすすめていきたい。

毎年のように「なぜ、その教材を選んだのか。」「なぜ今、その教材なのか」という課題が話し合われ、深められてきた。音楽の授業を創るとき、教材を選び、そして深める仕事はきわめて大切なことである。そして、教師が周到に準備した教材を子どもたちがどう受け止めるか、その出会いは実にさまざまである。たとえ下を向いて黙っていたり、立ち歩いたり、関係ないようなことを話していたりしていたとしても、子どもの目はまっすぐあ

りのままを見つめ、濁ってはいない。むしろ感性の鋭さをもっていることを目の当たりにすることができる。「法則とは、自分が発見したら役に立つが、人から教わるとあまり役に立たぬものだ。」という言葉がある。私たちの仕事に、これで十分ということはない。だからこそ、子どもが豊かに表現してくる事実から、常に学びあうことが必要と考える。

音楽の授業は、選び抜かれた教材を媒介にして、子どもたちと教師が心を通い合わせながら、育ちあっていく場といえる。教材を選択する感性を豊かにし、選んだ教材を音楽として魅力的に表現できるよう精一杯努力して伝えること。教室で生まれた音楽に心寄せ、共有し、共に育ちあっていこうという子どもたちへの信頼。など、授業を創造するための大切な課題がある。

上から教えるという目線ではなく、一人ひとりの想いや表現を大切にし、子どもたちが一緒に音楽する楽しさに気づき、それぞれの音楽に心が動き、お互いに高まろうとする教室から、たくさんのことを学ぶことができる。今年も子どもの事実と授業の事実をいっぱい語り、学びあいましょう。』

3 各レポートの内容

(1) 「子どもが歌うとき」旭川市 富田睦美さんのレポート

転勤して2年目となった特別支援学級の子どもたち、特に3人の子にスポットを当てて音楽を通したかかわりや成長がまとめられている。

6年生 T 君…歌が大好きで大勢の中でもひととき大きな声で歌う T 君。5年生後半から、常に周りのことが気になる脅迫症のような行動をとるようになり、自分の髪の毛を抜いてしまう。交流学习でのいじめが原因の一つにあったようだ。その後症状は改善され、最近では自分から好きな曲の CD を聴きたいと言いだし、一人で聴いている。

1年生 N 君…保育園にはほとんど通えず集団生活の経験がない N 君。体を動かすことは大好きだが、歌ったり踊ったりすることには強く抵抗する。友達とのかかわりのなかなかもてない。ある時、「ホップステップジャンプくん」の歌を歌っていると、歌詞の一部を歌っていて、大変驚く。大げさに喜び、褒めると歌わなくなってしまう。

2年生 Y o u 君…重い自閉症だが、少しずつ意思表示ができるようになる。最近小さい声だが、「まほうのすず」をよく歌っているという。

知的学級 10 名の子どもたちが合同で音楽をできる時間はほとんどないそうだ。それでも、特別支援学級では朝の会の時間をゆっくりとすることができ、その中で毎日歌うことを大切にしている。「今日は何を歌うんだろう？」子どもたちが楽しみにしていたひと時だったに違いない。そんな地道な取り組みが子どもの心に届き、小さな変化を生み、大きな一歩となっていたと思う。悪戦苦闘しながらも、いい教材を歌い続けたい、一緒に歌いたいという指導者の想いが伝わってきた。

(2) 「歌声は安心のバロメーター」 釧路市立城山小学校 山口政世さんのレポート

今年度担任した情緒学級 5 年生、A 君の歌声と心の変化が綴られている。

A 君のトレードマークはマスク。前年度の担任が「A 君はいつもマスクを外さない。」とぼやいていた。それがいつの間にか学校にマスクをしてこなくなった（7 月）。この頃朝の歌では、少し口が動く程度。

朝・帰りの会は障害種別に行っているが、ときどき学習グループの 5・6 年生で帰りの会をすることがある。こういう時は「やったー！」と子どもたちが喜ぶ。山口学級では、その日の日直が歌を選んでみんなで歌うことになっているからだ。

学習発表会が終わったある日。帰りの会を 5・6 年生ですることになった。その日の日直は A 君。A 君が選んだ曲は、1 年近く歌っていない「すすめ山賊」だった。みんな楽しく歌い、A 君の歌声がかつてないほどはっきりと聞こえた。去年の歌の時間には、決して楽しそうな顔はしていなかったのに……。きっと、顔には出さなかったけれど、A 君の心には「楽しい歌」として届き、心の奥にずっと残っていたに違いない。

レポートの最後の文をそのまま転記したい。山口氏の想いが書かれている。

『音楽の授業をするとき、「しっかりと声を出して歌ってほしい」と思うのは、教師として当然のこと。では、どうしたら「しっかりと声を出して歌」えるようになるのか。「声」は心のありようを反映している。教師との信頼関係を築き、安心して自分を出せる空間を作り、そして、歌いたくなる教材を用意すること。A 君の歌声の変化は、これらの大切さを改めて私に示すものとなった。』

(3) 「とりわけ個を大切にすること」 釧路管内標茶町立公立中学校時間講師 石窪満さん（共同研究者）のレポート

10 月に行われた学校祭の発表に向けての取り組みの様子と、何を大事にしてきたのかという指導者の想いがまとめられている。

「2 学期はスメタナの「河の歌」でスタートした。はじめからあるとパートを抜いて 2 部合唱にしようと考えていた。合唱が苦手だという男子たち。男声パートの出だしの 8 小節、♪山々の泉 であい やがてひとつの川になる…♪を歌うと、誰もが「あっ、オレにもこの合唱、うたえそう！」と思わせるメロディーだ。そして、♪むかしの勇士の歌ひびく祖国のため 兄弟たち 腕を組め…♪と、男子にとってはちょうどいい音域で、自分たちの出番と思って歌ってくるのがなんともいい。女性のいわゆる主旋律が聞こえないぐらい思い切って歌ってくる。その勢いに刺激されたのか、女子もどんどん歌いこんでくる。♪兄弟のもとへ かえるだろう♪の「だーろう」の 6 度の跳躍も難しいが、「もう一度やってください！」と積極的だ。ユーダの女声たちの高いソも、はじめは聞こえなかったが、

だんだん歌い始める。やはり『教材』の魅力だろう。」

このように歌い進めながら、学校祭で歌う曲を渡していく。9月の後半にはステージへの登場の仕方など、子どもたちがいろいろ話し合いながらプログラムが決まっていた。石窪氏は授業の中で時折、こんなことを言ってきた。『「歩く歌」はいろいろな歩き方があるように、歌もそれぞれ好きところがある。主張があり、小さい声も大きい声もみんな認め合い、表現することを楽しんでほしい。また、「ます」の詩と音楽に対しての思いは、きっとみんなさまざま。気に入っている所もみんなそれぞれ。だから、その自分の気持ちを大事にして歌ってほしい。それが一つになって、今日という日の16人の音楽があるんだからね…』と。

今ちょうど声変わりの過渡期にある子に対しては、『音域によっては声が出しづらく、歌いにくいところがある。でもその声は、人生で一度しかない声なんだから、音程があっていないかなと思うかもしれないけど、その声で自分の気持ちをしっかり歌ってね。』とみんなの前で励ました。

ところが石窪氏は体調を崩し、学校祭の前日まで、2週間ほど学校を休んでしまう。このピンチを周りの支えと子どもたちの熱意で克服していった。当日の感想を彼はこう語った。『学校祭当日は、みんないい顔をしてくたした。緊張の中にも、今日という日の音楽が響いた。指揮者として、子どもたちの前に立ったとき、食い入るように見つめてくれる目に励まされた。この子たちのいつもの輝きや個性をいっぱい引き出せる指揮をしたいと強く思った。』

『合唱とか合奏を教育内容に持つ音楽の授業では、一人ひとりの表現を押さえ込んだり、突出しないようにして、「そろえる」とか「仕上げる」ということを優先することがある。そして、一人ひとりの表情を全く見落としてしまうという危うさをもっていると思う。』石窪氏は、「きれいにまとめることがそんなに大事か！」と学校教育での音楽活動について、もっと「一人ひとりの思いを受けとめる」ことが大切であると力説する。そして、ヴァイオリニストで元東京フィルハーモニー交響楽団のソロ・コンサートマスター、荒井英治さんの言葉を引用してこう述べている。

「(学生を教えていて) 自分でものを考えるというのが弱いのではないか。オーケストラというのは、一人ひとりが全体のために埋没するんじゃなくて、一人ひとりが自立して自分の感性・自分の気持ちを持って演奏して、それでお互いに聴きあってアンサンブルする。これは自分の意見を持ちつつ、どうしたら意見のすり合わせをするか、社会の縮図だと思っている・・・」

『このことは、音楽の授業にもあてはまるのではないだろうか。自分自身が、音楽を表現する楽しさを味わったり感じたりするより、自分の気持ちを押しえつけ(無意識にも)、合わせたり、飛び出さないようにすることが求められてしまう。しかし、そうではなく、みんなが(一人ひとり)自分の不十分さを自覚しながら、考えてみる、表現してみるとい

うことなしに、本来のアンサンブルは生まれないと思う。一人ひとりの表情に敏感になり、気づき、共感するところが教室ではないだろうか。』

そして、最後はこう締めくくっている。

『音楽をしている時、みんなで声を合わせ、いろいろな感情がわき起こってくると同時に、心ひとつにして一体感を味わったり、隣の人との連帯感とかみんなでやりきったという達成感のようなものを与えてくれる。このことは何も否定しない。

しかし、子どもたちの感じ方や表現は実に多様だ。そんな時、どう子どもたちと向き合うか、どんな文化をともに創り出していくかが問われる。一人ひとりの思いを受けとめるということは、一色に染められた全体ではなく、一人ひとりと真向かうということだから、「そろえる」とか「仕上げる」という考えを全く排除するということだ。

とりわけ個を大切にするということは、こんな思いから出てきている。そうして全体を見た時、一人ひとりの顔も見えてくる。最近そんなふうを考えるようになった。』

(4)「今までとこれから (2008年～2013年～2016年)」 札幌市立みどり小学校 北村 公一さん

再任用の4年間で行ってきたことについてまとめている。

主に算数のTTとして教室に入っているが、時間を見つけて各学年の状況に合わせて音楽の指導もしている、とのこと。その内容も、発声・発音の練習から歌唱・合唱の指導、リコーダーの指導、琴・トコリ・馬頭琴などの紹介と演奏と様々。そして、全校合唱も担当しており、子どもたちに音楽の魅力を届け続けている。

また、教科「道徳」の準備が進む中、①道徳とは何か ②道徳でどんな力をつけたのか ③道徳でどんな子ども像をめざすのか ④戦前の修身とどこが違うのか ⑤文科省のねらい・意図は何か ⑥評価はどうするのか などの問題意識を持つ必要がある。そして、これらの問いは、「音楽」に変えても同じである、と述べている。

最後には、『これからも、平和・連帯としての音楽、勇気・人権としての音楽、記憶・癒しとしての音楽を考えていきたい。』とまとめている。

3 話し合いの様子

4本のレポートについて話し合いを進めていった。大学生からは、具体的な指導方法や、教材選択などについて多くの質問が出た。その中で、音程や声の大きさのこと、評価はどうするのか、など改めて考えるきっかけとなった。

話し合いの中でキーワードとなった言葉は、「そろえる」。石窪氏のレポートの中にも書かれているが、合唱や合奏を指揮するとき、ごく自然に「そろえる」ように演奏者に求める。しかし、そのことを音楽の授業にそのまま持ち込んでいないだろうか。「そろ

える」とか「仕上げる」ということを優先し、一人ひとりの表情や表現を見落とししていないだろうか。音楽教育の中では、まずは自分の表現を大事にする、一人ひとりを大事にすることを忘れてはいけない、ということを確認した。

音楽はすごい力を持っている。歴史的にも、ヒトラーがワーグナーの音楽を好み、そのリズムで国民を興奮させ、自らの思想に取り込んでいったとされている。学校教育でも、例えば合唱コンクールや集団作りでの音楽など、気を付けなければならないことがある。「何のために音楽教育をしているのか?」。改めて考える必要性を強く感じた。

今回レポート発表した方からは、レポートづくりの意義について意見が出された。レポートに書くということは、日々の実践記録であり、自分を振り返る良い機会である。

「立派なことを書いたなあ。」と思えば、それが自分の決意表明になる。その気持ちをもってまた実践してみる。この繰り返しが大事ではないか。忙しい日々ではあるが、来年の分科会に向けて、宿題が出された。

4 来年度への課題

ここ数年、参加者が少ないことが課題となっている。世の中には多くの音楽教師や音楽にかかわる人がいるのに。ほかの分科会のように、高校や大学の教師・研究者などにつながることはできないか。どうしたら広げることができるのか…なかなか解決策が見つからない。そのなかで、参加してくれた大学生がこんなことを言ってくれた。「来年も参加します。」うれしいことだ。この分科会で学んだことを生かして、実践を続けていきたい。